

# フランスの都市と地方の関係について文化面での眺望

—— アンドレ・ジッドの『根こそぎにされた人々』について ——

立川 信子

グローバリゼーションと地域の時代は近年問題になっていることである。グローバリゼーションは企業の海外発展と関連して論じられることが多い。またアメリカのグローバルスタンダードというようなアメリカ経済を標準として用いることに關して使われる。マルチメディアを通じて世界中の文化が均一化されていくという文化的な現象もある。従って、グローバリゼーションとは経済的にだけでなく文化的にも世界的規模で均一化していくことをさしていると言えるだろう。世界には同時進行で同じ現象がみられるが、すべての文脈が同一ではないためにこの現象が多くの問題を生じることが反グローバリゼーションという形で論じられている通りである<sup>(1)</sup>。

地域を活性化する動きはそれを補足することができるだろう。地域重視もまた地方の発展や財政の地方への移管というように経済に關連して論じられることが多い。労働力の安価な地域に企業は移転する。または安価な労働力が移民として流入する。その時地域を維持するにはどうしたらよいか。これはまさにフランスでも生じている。労働者の権利が保護されてきたが故に企業が雇用にかかる負担を避けてフランス以外の国に移動していく。ある日本企業の移転問題もまだフランスの国の補助金をめぐって2008年現在係争中のままである。

特に国は特別な枠組みであり、愛国という観念もブチナショナリズムとして若者にみられると言われている。団塊世代のかつての新左翼に対して新右翼という呼び名も登場した。フランスは政治的にも中央集権の国であったが、近年分権化の方向がめざされている<sup>(2)</sup>。しかし、パリは政治的文化的な中心として現代まで大きな役割を果たし

て来た。たとえば現在も世界有数の観光地である。そのためにアメリカのショーウィンドウの一つがディズニーランドであるという意味で、経済的にもショーウィンドウの役を果たしている。それは19世紀以来の都市開発と文化的繁榮によるところが大きい。現在に至るまで観光資源の保存と開発に多くの資源がさかれてきた結果でもある。この大きな都市と地方との差は大きく、後の *province* という単語にみるようにフランスはパリとパリ以外に分けられるほどである。長い年月都市は文化を育ててきた。パリはまさにそういう都市の象徴である。現代において地方の時代というのは、グローバリゼーションの中で個々の地域の価値や活動がなくなってしまうということも意味しているのだろう。しかし、他方で、地方ということばは、都市というものが代表していた、地縁や血縁から解放された個人の価値や、地方というある特殊なものを超えて普遍的なものを求めることを否定して、むしろ地縁血縁に基づく集団の個人に対する優位という意味で全体主義的な意味が内包されて使われることもある。後でみるように、これはジッドとバレスの論争の中心点である。

## はじめに

本論文ではこの論争にいたるまでとそれ以後の、フランスの中で中央と地方の文化的關係について、19世紀から現代までの幾つかの小説に現れるフランスの地方についての描写をみることでフランスの地方に關する意識を概観し、この論争の現代における意味を考える。ここで取り上げる小説はフランス文学の概説書として定評のあるいわばフランスの教科書版に挙げられているものの中

(1) 金子勝『反グローバリズム』、岩波書店、1999年。

(2) Aulhon, Maurice, 『Le Centre et la périphérique』, Les

Lieux de mémoire, III La France 1 Conflits et partages, la direction de Pierre Nora, Gallimard, 1992.

から選択した<sup>(3)</sup>。フランス語の世界的な影響力の低下はフランスでも十分危機的にとらえられているが、国内での文学の影響力の低下も顕著な現象とみられている。日本におけると同じく、小説などの出版が低調というよりも、古典と呼ばれる学校教育で取り上げられるような評価の高い作品が読まれなくなったということである。そういう事態でも、フランス人が一般的に国民的教養とみなしている作家の作品を取り上げる<sup>(4)</sup>。

地方の意味も役割も時代と場所によって異なってきた<sup>(5)</sup>。フランス語には国と国家、祖国という意味でpays, nation, état, patrieというような単語がある。それぞれ地理的な意味、行政的な意味というように使い分けられている。paysは古里pays natal, 郷愁mal du paysという時に用いられることからわかるように最も政治的な意味が少ない単語であり、広範囲に用いられる。この語に似ているがもっと心理的な負荷の大きな語patrieがある。これは祖国に近い意味で用いられる。フランス国歌にもでてくる。この語にはpaysと同じく出身地という意味もある。nationには民族という意味、つまりrace, peopleと近い意味で用いられる場合もある。

地方、ある都会を中心とした地域という単語としてはrégionがあるが、paysも用いられる。régionよりも一般的で古い単語としてはprovinceがあり、これは田舎という意味を持ち、パリ以外のフランスをさす時に用いられる。villeとprovinceという時、これには都市と田舎、中央と地方という二つの含意がフランス語には含まれている。provinceの形容詞形であるprovincialには「パリの今のはやりではなく少しぎこちない」という意味がある。都会に対して田舎を意味する単語としてはcampagne, champsがprovince, pays natal以外にある。これにはrégionのような行政単位としての

まとまりの概念はない。

地域としてはrégion, lieu, endroitというような単語があるが、région以外は場所という空間的な一般的概念という意味で用いられる。土地terreが血と土地という人間の所属を表すように、むしろ政治的な意味で使われる。ロワイアル氏の土地でサルコジ氏が選挙活動をするというような報道では地盤という意味である。また、県という単語départementもパリに対して地方という時には使われるが、これはrégionよりも小さい地域に区切られた行政単位を意味するといえる。

従って、国についてはフランス語の方が日本語よりも語彙数は多く、細かく使い分けられている。フランス語は英語に比べると語彙の少ない言語と言われることが多いが、フランス文化が一般的に厳密な定義による議論を重視することから考えれば国のように文脈によって定義の異なるものをさす場合に語彙はふえるのだろう。他方で国と地方の両方に使用できるpaysのような単語があるということはこの単語で国という時には厳密な行政単位という意識がないと考えられる。

## 1 フランス19世紀の文学における都市と地方の関係の例

フランス大革命以前の王制がすでに中央集権と地方分権の二つのイマージュに分かれている<sup>(6)</sup>。19世紀前半はロマン主義の時代であり、地方色が尊ばれた<sup>(7)</sup>。その反面、フランス革命以来中央集権が進むとも見られている。地方ということに関連して、フランスでは絶対王政以来、地方の田舎風と都会の洗練の対比はアラン・コルバンも指摘している<sup>(8)</sup>。バルザックの『人間喜劇』には『パリの情景』と『田舎の情景』がある。前者では『ゴリオ爺さん』、後者では『ウージェ

(3) *Linéaire textes et documents*, collection Henri Mitterand, Nathan, 1992.

(4) 以下に言及した文学作品はガリマール社から出版されている。出典および引用は本論文では省略する。

(5) 以下の国、地方の定義はle grand Robert de la langue française (1988)による。

(6) Revel, Jacques, 《La région》, *Les lieux de mémoire*

III, p. 855.

(7) *Ibid.*, p. 877.

(8) Corbin, Alain, 《Paris-province》, *Les lieux de mémoire*, op. cit.; 邦訳, アラン・コルバン「パリと地方」, ピエール・ノラ編『記憶の場, フランス国民意識の文化=社会史《対立》1, 岩波書店, 2002年, 343-391ページ。

ヌ・グランデ』というよく読まれる作品が書かれている。『ゴリオ爺さん』では、田舎の青年がパリに上京して変わっていく様が描かれている。パリでも田舎でも人間は欲望に満ち、葛藤のつぼみである。田舎が停滞的で閉鎖的であるのに対して、パリでは葛藤も苛烈であるが、生氣にも満ちている。その対比の中で特異なのは『田園の情景』*Scènes de la vie de campagne*という別に区分された作品群であろう。田園*campagne*は田舎という意味もある都市に対立する語である。これは郊外編ともいうべきであろうか。『谷間の百合』が分類されている。この場合の田園は地方という都市の生活でありながら、パリから離れていると言う地理的な意味よりは、自然の中の伝統的な生活と都会の新しい生活と言う対比の方が大きい。谷間の百合にたとえられた母性的な夫人とパリの女性のあいだで揺れる青年が描かれている。田舎が子供の頃の郷愁とともに両義的な感情を混めて描かれているのである。

この田舎と都市の対比の両義性をさらに発展させたような例がスタンダールの小説にみられる。『赤と黒』ではあきらかである。田舎出の青年ジュリアンが最初はアルプスの地方都市の名士の夫人に、ついでパリの大貴族の娘と恋に落ちる。パリはジュリアンの出世欲の頂点でありながら、母であり子供のままである古里を理想化したルナール夫人の魅力は決定的である。

フローベールはパリに近い地方都市ルーアンの郊外で小説を書いた作家であるが、『ボヴァリー夫人』には田舎の退屈な生活の中で絶望していく女性が描かれている。自伝に近いと言われている『感情教育』にはパリの生活に行き詰まり、一時的にはパリでの活動と田舎の生活に揺れる青年フレデリックが描かれている。この小説はあたかもフレデリックが都会生活ではなく、人生そのものに行き詰まったかのように終わる。フローベールは書簡においても田舎に対して、特に彼を取り巻く閉鎖的な田舎のブルジョアにうんざりすると言う否定的な観点は明らかだが、都市と田舎の違いよりは人生そのものに対する問いかけという普遍的な観点の方が強く、田舎はいわば観察のモデル・ケースであり、バルザックとは異なって小説

を書くために引きこもった孤高の場所であり、パリには必ずしも活動の拠点という意味はないように思える。

このように19世紀の第三共和制までの時期を代表する小説を概観しただけで、都市と地方は、現在の都市と田舎と言う意味が作られていて、進歩的な開放性と閉鎖的な後進性というイメージも固定的である。ただ自然という肯定的な要素が地方と田舎にはもちろん付随している。ところが第三共和制の前半を代表する作家ゾラになると地方も人は移動してパリと密接な関係を持っていたり、工業化されてくる。『居酒屋』や『ナナ』には都会に流れ込んで労働者になった人々やその子供たちが描かれている。地方もパリとの緊密な関係の中にはいってくる。『獣人』はパリと北の都市とを結ぶ鉄道員を描いている。『ジェルミナル』は最近も映画化されてゾラの中では比較的一般によく知られた作品であるが、鉱山のストライキを描いている。ここには田園の牧歌的な自然はもう存在しない。『居酒屋』のアルコール蒸溜機や『ジェルミナル』の炭坑の崩れていく建物が動物的なイメージを持っていることからわかるように自然は空間的に排除されて、かえって人工の物の中ににじみでてくるかのようである。

## 2 19世紀末から20世紀初頭のジッドとバレスの論争

ゾラの後半生にあたるドリュフェス事件に続く第三共和制の時期は左翼と右翼の攻防する時期でもあるが、地方に関する論争も右翼と左翼によって異なり対立的であったと言える。右翼的な小説家になっていったバレスと左翼的なということが出来るジッドの間での論争に例を見ることが出来る。この論争は1898年「エルミターージュ」誌に「『根こそぎにされた人々』について」と題して最初に掲載された。次いで1903年「ポプラの木の論争、モーラスへの返事」として掲載された。バレスの小説『根こそぎにされた人々』で、バレスが地域に根付くことによつてのみ人間は生きることができ、地域という根を失って都会に生きる人間は根の切れた植物のように破滅すると言っている<sup>(9)</sup>。

ジッドはそれに対して、自分がノルマンディーのカトリックとラングドックのラテン的風土のプロテスタントから生まれた。つまり地域の文化の混合によって生じたこと、また植物は根付くことだけでなく、移植されることによって成長することという二点から反論した。ジッドにとって古里は相反する二つの地域であるということである。また古里を離れなければ強い人間は成長できないと言っているのである<sup>(10)</sup>。

前者の二つの相反する傾向というのはジッドの誇張であることが指摘されてきた<sup>(11)</sup>。ノルマンディーの母方の家族もプロテスタント系であるからである。これは当時の南はフランス文化の古典、古里としてのラテン文化を継承する場所という象徴性を持ち、中央のカトリック政権に抵抗する左翼、プロテスタントの活動の拠点でもあったからである。それに対立するものとしてノルマンディーはイギリスに近くバイキングが侵攻した土地でもあり、ドイツ的なロマン主義的な場所とみなされている。南北のこういう対比的な見方はドイツのロマン主義が大革命直後フランスに紹介されて以来フランスにひろく普及した見方である。19世紀にはボードレールの評論にも見られる<sup>(12)</sup>。北と南を対比する見方は単純に現代でもフランス人が退職後天気の良い日の多い北よりは日照時間の長い南フランスを好むことにもあらわれている。

より正確にいうならジッドは地方文化の混合した都会パリを古里としているのである。そして地方は、休みに出かける非日常的な場所として都市に必ず付随している。ここで旅について考えておかななくてはならない。ジッドは社会的道徳や家族からの解放をテーマとしてきた作家である。そしてそのテーマはしばしば旅として現れる。19世紀末フランスの植民地がふえ、鉄道によって旅行が大衆化の第一歩を踏み出した時期に生まれた作家

にとって、旅はまだ植物の移植に近い文化的衝撃を与え得る手段であった。『地の糧』は旅による過去や家庭からの離脱と喜びを歌って後世の青年を熱狂させたのである。このような旅は便利に安全に安価になることによってあたかも日常の連続のようになってしまい、非日常性からの離脱という機能を非常に薄めてしまった今日の団体旅行とは異なることはいうまでもない。また旅が離脱として機能するのは都市と地方、フランスとフランス以外の国、アルジェリアやコンゴやロシアの間に大きな文化的な違いがあったからである。19世紀シャトーブリアンをはじめとして、フローベールやネルヴァルなど非ヨーロッパ世界への旅は覚醒の機会であった。その頃よりは容易になったとはいえ旅は安価でも容易でもなかったために移動というよりは定住地を変えるような行為に近かったから、移植という概念が想起されるのである。旅によって自分の共同体から離れることになるのである。

他方、共同体から離れた個人のあり方を共同体における個人のあり方と調和させなくてはならない時には、個人として共同体に所属することを選択すると考える。この考え方はジッドがよく読んだルナンに見られるが、一般には「20世紀初頭、国民のアイデンティティは、世襲的な国民的性格に基づいていると信じられていた」とすると、ジッドのような考えは、世襲よりは「今日では国民のアイデンティティの根拠は文化の連続性に求められるようになっていく」という後天的獲得の意味に近い<sup>(13)</sup>。この文化的連続性をクシトフ・ポミアンが次のように説明しているからである。「記号として、同時に物質的な事実として理解される文化であり、その連続性は広い意味での過去の作品、過去の作品が伝えるモデルと模範、そして過去の作品を理解し、保存し、複製を作り、作品目録を豊かにするために必要なノウハウの継承に

(9) Barès, Maurice, *Les Déracinés, Romans et voyages*, Robert Laffont, 1994, pp. 493-751.

(10) Gide, André, 《À propos des Déracinés》, *Essais critiques*, Gallimard, 1999, pp. 4-8, pp. 121-126.

(11) Martin, Claude, *André Gide, écrivain de toujours*, Seuil, 1986, p. 9.

(12) Baudelaire, Charles, *Œuvres complètes II*, Gallimard, la Pléiade, 1976, pp. 420-426.

(13) Pomian, Krzysztof, 《France et Gaulois》, *Les Lieux de mémoires III*, op. cit. 1992; 邦訳, クシトフ・ポミアン「フランク人とガリア人」, ピエール・ノラ編『記憶の場』1, 前掲書, 118ページ。

よって保証される。したがって国民のアイデンティティについて提起されている諸問題は、今日では系譜ではなく、記憶として言い表されているのである。」<sup>(14)</sup>

個人が文化を継承することで国民ができるわけであるが、その継承される物が個人的利害と衝突する場合に関して、ジッドは「個人主義の最高の形は自己犠牲にある」と言っている<sup>(15)</sup>。ジッドはキリストの教えも個人主義の教えと解釈している。聖書の中で家族を特別視する考えはキリストによって否定されているからである。特殊なものが普遍的なものなのであるとも言っている。地方のように具体的で個別の特色のある部分が集合して一般ということが出来るわけである。地方があつて中央があるということが出来るわけであると言ひ換えることも出来るだろう。つまり、この論争は地縁や血縁による共同体の重要性を説くバレスに対して、個人と共同体の価値の均衡こそが必要なものであると言っていると考えることが出来るだろう。

ジッドの小説を単純化してこの観点からだけみると、この均衡が可能なのかという問いかけの連続である。『背徳者』はフランスという社会のモラルから離脱したあとアルジェリアで妻を死なせて、生きる意味を見失うという物語である。フランスを中心とすると、アルジェリアは周辺部といえるだろう。この小説の中心人物は中心と周辺の往復運動を繰り返すことで中心を見失うといえる。『狭き門』は逆にノルマンディーの田舎の中産階級のモラルとプロテスタントの教えによって生きる意味を見失う物語と解釈できる。地方から動かないで活力を失うという見方もできるわけである。『法王庁に抜け穴』にはまさに根無し草ともいいうべき国籍不明の私生児が「動機のない」殺人を犯す物語がメインストーリーとして組み込まれた価値喪失の物語とみることが出来る。この部分に限ってみると、フランスのパリとポーなどの地方都市からイタリアに殺人者と被害者は移動する。中心から周辺への移動によるモラルからの

離脱と破滅と解釈することができる。『贖金作り』のメインストーリーは二人の青年のパリの日常生活からの離脱と帰郷である。中心と周辺という空間的位置づけは共同体への所属と共同体から離れた個人の孤立というテーマと重なっている。パリは中心的な帰郷の場所として重要なイメージを提供している。特にルクサンプール公園Jardin du Luxembourgは出会いや会話の重要な背景である<sup>(16)</sup>。この公園はフランス語ではルクサンプールの庭である。庭は都会の中に自然が整頓されて導入された場所であり、いわば都市と田舎を合体させた場所である。

### 3 20世紀の文学の文化に表れた都市と地方の関係の例

ジッドと同時代の大作、プルーストの『失われた時を求めて』の大部分を占めるのはパリであるが、地方も大きな役割をしている。この長編小説の最初の巻は語り手の少年時代に休暇をすごした場所、田舎コンブレ、そして青年の恋の始まりはノルマンディーの保養地バルベックである。友人サン・ルーを訪ねる兵舎の町、鉄道の旅で出会う牛乳売りの少女の生命感、女中フランソワーズの田舎者ぶりなど地方色豊かに描かれている。詳細に微妙に描かれたいわばそれらの特色が地方という地理的制約を離れていつしか抽象性の高い人間性や象徴性の高い空間感覚に達しているのはプルーストの比喩の概念をよく表しているからだろう。

これらの大小説家に続く世代の超現実主義のように現実離れしている創作にもパリは大きな役割を果たしている。プルトンの『ナジャ』は、パリの風物を連想させる。超現実主義自体がパリの前衛的な芸術と、町の風景の想像力の連想を呼ぶ力と無関係ではない。超現実主義から共産主義に移行した作家アラゴンの初期の小説『パリの田舎者』はパッサージュのウィンドウからの連想を描き出している。後年の作品『オーレリアン』はテ

(14) 同上書、119ページ。

(15) Gide, 《Billet à Angèle [mars 1921]》, *Essais critiques*,

*op. cit.*, pp. 280-281.

(16) Gide, André, *Romans*, Gallimard, 1958, p. 1208.

レビドラマにもなったよく知られた小説であるが、地方出身のあか抜けない女性にパリの青年がひかれていく。再会した時がその女性の死ぬ時という悲恋の物語である。この物語にもパリと田舎の対比があるが、田舎は神秘的な魅力を持っている。戦争をテーマの一つとしているこの小説にパレス以来のナショナリズムと同じ構図をみることができる。

ジッドなどの文化人の創刊した『新フランス批評』誌はセーヌ左岸で作られた。フランスの知的な活動、特にジャーナリズムと関わるものは左岸の狭い範囲で生産されていたと『セーヌ左岸』には書かれている<sup>(17)</sup>。日常的な知識人の論争から文化が生産されていったということである。これはサッカー選手ウエッカムがアメリカのチームに移籍した時に、プロのサッカー選手としてのウエッカムは終わったというBBC放送が流したコメントにも表われている。このパリを知的活動の中心として、地方の文化面での劣勢とみる見方はサルトルの実存主義まで続いているといえる。サルトルの『嘔吐』には、ル・アブルの港町で高校教師をするロカンタンは自分の生活に閉塞感をいだいて実存感覚に目覚める。実存主義の議論がパリの左岸サン・ジェルマン通りのカフェで展開されたことはよく知られている。『存在と無』にはボーイのたとえが用いられている。

しかし、このような傾向は、実存主義以後はみられない。カミュの『異邦人』はすでにアルジェで起る物語である、アルジェリア生まれのフランス人が語り手である。しかも内的独白にみえながら、内的独白ではないと言ういわば空洞化された語り方をする。

さらにヌーボー・ロマンになるとパリの存在感はさらに小さくなる。ヌーボー・ロマン自体が地理的な規定がすくない小説が多いのは小説の実験的性格からみて当然であるが、マルグリット・デュラスの最初の小説『太平洋の防波堤』も晩年の映画『愛人』もカミュと同じく失われた植民地ベトナムである。この二つの作品の間に描かれた小説や演劇の多くは場所不明である。小説や演劇

の構成が色濃くフランスの古典主義的な単純さを受け継いでいるが、それ以外の要素は排除されているものが多い。人間の問題の普遍性を浮き彫りにするためだろう。空間的な規定が排除することで特殊な状況にいる人間の普遍的な問題を浮き彫りにしているのである。人生の終わりにもう一度失われた祖国という特殊な状況をそのままに描いたのは逆に特殊な要素の排除に否定的になったからだろう。

さらにヌーボー・ロマン以後の物語の復権とも言うべき現代の小説家ル・クレジョの『ル・モンド』は南仏の港町を思わせる。小説家自身も世界中を移動している。ミシェル・トルニエの小説もパリを中心とした世界を描いてはいない。しかし、パリは幾つかある極の一つではあるとはいえる。『黄金のしずく』の中のパリの牽引力に例をみることができるだろう。実存主義までの小説がパリに視点をもっているとしたら、現代の小説は外縁的な部分を視点にしているといえるだろう。現代では中央を視点にした見方よりは周辺を視点にした見方が優勢になっている。しかし、それは中央を中心にした見方があって、それに対抗して文学が作られているからといえるだろう。

比較的最近の映画でフランス人の日常をよく描いているとされるエリック・ロメールの映画『玉の輿』*Le beau mariage* (1982)にも結婚願望のル・マンの古物商で働くパリの女学生とパリで弁護士を開業している男性の対比に田舎と地方の対比は表れている。

近年ヒットした映画『姉妹のけんか』*Les Sœurs fâchées* (2004年)をみると田舎で働く外見はやほったいが健康な人間味あふれる妹と都会でおしゃれな専業主婦の疲れた姉が描かれていて、文化的な洗練性の対比は従来と同じだが価値は逆転している。エコロジーの叫ばれる中、自然に近いものとして地方が復権している<sup>(18)</sup>。しかし、この地方が、コルバンが指摘しているように、現代では都市の郊外として機能しはじめている地方であることは注目に値する。妹は単に地方で働いているのではない。パリで出版するために自作の本

(17) ロットマン、『セーヌ左岸』、みすず書房、1985。

(18) Alexandra Leclère監督

をもってやってきているのである。ある日素晴らしいと思う人にてあってラブレターを渡す彼女の再婚の時の話はパリの男性も感動させる普遍性を持っている。ここでは田舎臭いことは自然に近いこととしてプラスであり、文化的には地方と都市に格差はなくなっている。

映画は先にあげた小説よりは従来の見方に近いのは、前衛的な映画を除けば一般的に映画は理解されるために、また商業ベースにのらなくてはならないために、既存の概念に小説より近いからだろうと考えられる。このような映画の中ではまだそうであるように、パリは観光とショールームとしての役割を今日まで維持してきた。しかし、サルトルの活動を支えた意味での文化的中心があり続けるかどうかは、小説にもみられるような、文化の世界的拡散からみて定かではない。またインターネットなどの通信機器の発展は文化の拡散に役に立っている。交通手段の発達のため物価の高いパリをさけて郊外に住む人は多い。もちろん、コミュニケーションの手段としてのネットは現在までのところ限られた役しか果たしてえない。セーヌ左岸というような知的な集中の場とはなりえなえず、ネットの不完全な通信が十全な意味でのコミュニケーションや思索を妨げることも少なくないことは指摘されているとおりである<sup>(19)</sup>。

## 終わりに

一般的に言えば、都市と地方の対立から都市の地方の吸収という過程をみることができる。あるいは都市を文化的経済的中心として従来都市も含めた都市化する地方と都市化しない地方の差異化、または経済的な優劣を重視した言葉をつかうなら、脱中心化による格差の拡大とすることができるかもしれない。ヨーロッパに押し寄せる移民をみると世界的な規模で都市と地方の差異化は加速しているようにみえる。第三共和制の時期は、都市を中心とした見方から、地方を中心とした見方と都市を中心とした見方を対置させる見方へと

移行する過程の最中に位置している。この段階では都市とは普遍的原理として個人主義を代表するものであり、地方とは特殊な利益集団として共同体を代表するものであった。『根こそぎにされた人々』論争は、地域と人間の関わり方が本質的か否か、地域に規定されない個人を想定するか否かを論争していることで、それをよく表している。

今日、地方も個人も都市や共同体との密接な物理的な関係がより発展したために、都市的なものは地方に拡散した。他方で都市は都市自身の周辺を拡大して物理的に巨大化した。都市化した地方、地方都市はこの巨大都市と地方の間において、普遍の集合の一部というよりは、特殊を表すようになってきたようにみえる。個人が共同体との調和を失ってさまよっているようにみえるように。これは今後今日の文化についてより検討することによって明らかにされるべき課題である。

(19) 正高信男『他人を許せないサル、IT世間につながれた現代人』、講談社、2006年。